

鑑別に苦慮した脾濾胞辺縁帯リンパ腫(Splenic marginal zone lymphoma)の1症例

◎永谷 大輔、南 勇輝¹⁾、池内 直美¹⁾、三浦 嵩之¹⁾、海野 光玖¹⁾、梁瀬 博文²⁾
 静岡県立 静岡がんセンター SRL 検査室¹⁾、静岡県立 静岡がんセンター 血液管理室²⁾

【はじめに】

脾濾胞辺縁帯リンパ腫(SMZL)は、脾臓の辺縁帯 B 細胞に由来する低悪性度 B 細胞性リンパ腫であり、脾臓をはじめ、高頻度に脾門部リンパ節、骨髄、しばしば末梢血に病変部位がみられ、非ホジキンリンパ腫の1%未満とまれな疾患である。今回、末梢血で fried-egg 様の細胞、自然乾燥では絨毛突起を認め、脾に病変の主座をもつ小型 B 細胞性腫瘍と鑑別に苦慮した脾濾胞辺縁帯リンパ腫を経験したので症例を交えて報告する。

【症例】

近医で糖尿病にてフォロー中。左側腹部に腫瘤を認める為、外来受診。腹部エコー・CT 検査にて巨大脾腫とともに腹部リンパ節腫大を認め、悪性リンパ腫疑いと診断され、精査・加療目的にて当科紹介。

【末梢血及び骨髄像検査所見】

末梢血 WBC 22,240/ μ L RBC 406 $\times 10^4$ / μ L Hb 11.9g/dL Ht 37.4% PLT 9.3 $\times 10^4$ / μ L

血液像目視 Stab 0.5% Seg 16.0% Eo 0.5% Ba 0.5% Mo 1.0% Ly 67.0% other cell 14.5%

骨髄像所見 年齢を考慮すると過形成な骨髄。芽球の増加はなく、リンパ球の増加が見られ3系統は減少。

other cell 25.4%認め、細胞質が広く、弱塩基性であり fried egg 様を示す細胞。標本引き始め部位での other cell は、絨毛突起を認める。

FCM CD19,20,22,cy79a 陽性 CD2,3,4,5,7,8,10,11,23,25,30,34,38,56,103,cy3,MPO,TdT

陰性 $\kappa > \lambda$ 軽鎖制限あり 染色体検査 46,XY,-7,-15,-17,+mar1,+mar2,+mar3[4]/46,XY[16]

【まとめ】

本症例では、末梢血で fried-egg 様の細胞を認め、自然乾燥では絨毛突起を認めた。このような特徴をもつ細胞の類縁疾患として有毛細胞性白血病(HCL)及びバリエーション型(HCL-v)、びまん性赤脾髄小型 B 細胞リンパ腫(SDRPL)があげられる。本症例では、形態学所見(絨毛突起が全周性ではなく極性)、骨髄生検、免疫染色、免疫表現型の結果から総合的に判断し、SMZL の診断となった。HCL、HCL-v は全周性の絨毛突起を認め、SDRPL、SMZL は極性の絨毛突起を認めるが形態学のみでの鑑別は難しく、免疫表現型による鑑別が必須となる。しかしながら、これらの類縁疾患の腫瘍細胞には各々、形態学的特徴をもつ為、そこを見極めることが重要であると感じた症例であった。

連絡先:055-980-5686